

平成二十七年 度

# 問題冊子

国語	教 科
国語	科 目
11	ページ数

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

## 解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

## 注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
3. 試験終了時には、解答用紙を机上の右側に置くこと。
4. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

[1] 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「自由」の実存的条件を探究する本章では、その可能性の最初のケイキ<sup>⑦</sup>として、わたしたちにはある一定の欲望の中心点が必要なのだと、このことを改めて強調しておきたい。

欲望がある程度を中心点を持つて初めて、わたしたちは、その欲望を叶えることによる「自由」、すなわち「我欲する」と「我なしうる」との、一致の可能性を感じることができるようになるからだ。

——ではそれは、改めていったいどうすれば可能なのだろうか？

先に「欲望・関心相関性」の原理について論じた時に見たように、わたしたちは世界の「意味」を、絶えずわたしたちの欲望において見出している。哲学者の竹田青嗣がいうように、世界は欲望の網の目なのだ。

喉のカワキを癒したいという欲望があるから、わたしたちは目の前の水を飲み水と認識する。虚栄や承認の欲望があるから、小さな装飾品が特別な意味を持つ。恋する人から送られたものだから、ただの便箋<sup>①</sup>一枚が価値を持つ。

世界は常に、わたしたちの欲望に彩られている。世界に意味の網の目を編み上げているのは、わたしたちの欲望にはかならないのだ。

とすれば問題は、この欲望が、わたしたちの「自由」の可能性を感じさせる程度に、どうすれば中心を持ちうるかである。

わたしの考えは次のようだ。

わたしたちは、自らの欲望が編み上げた実存世界を生きている。しかしその網の目は、時にただ散逸するばかりで、中心点を持たないことがある。結び目を持たないために、きわめて粗い網目であることがある。<sup>②</sup>

それはつまり、世界が豊かな「意味」で織りなされていないということだ。

わたしたちは、たとえばだれか恋する人を求める時、周囲の異性——時に同性のこともあるだろうが——をそのような欲望から「意味」づける。社会的成功の欲望を抱いていたとするならば、そのチャンスを与えてくれそうなものに常に「意味」を見出そう

とする。あるいは、否定的な欲望ではあるが、ひどいルサンチマン(妬み、そねみ)を抱えていたとするならば、世界は憎むべき対象としての“意味”を持つこともある。

しかしそうした“欲望の中心点”がわたしたちに結ばれていない時、世界はただそこにあるだけ“のものになる。結び目のきわめて少ない、粗い欲望の網の目。それが、自分がいったい何を欲しているのか分からないという苦しみの本質構造なのだ。

とするなら、わたしたちはその粗い欲望の網の目に、まず何らかの形で“フック”をかけ、こちらにたぐり寄せ、その中心点を編み上げてしまう必要がある。そうしていくつもの結び目を作り出し、そのことで世界に豊かな“意味”を作り出していく必要がある。

絶望の淵にあつてさえ、人は世界に“意味”を見出す(作り出す)ことができる。そのことをかつてだれよりも奥深く語ったのは、『夜と霧』におけるフランク(一九〇五—一九七)である。

ナチスのユダヤ人強制収容所に送られてしばらく経ったある日、フランクは、ある種の奇跡的な体験をする。

とうてい信じられない光景だろうが、わたしたちは、アウシュヴィツからバイエルン地方にある収容所に向かう護送車の鉄格子の隙間から、頂<sup>いただき</sup>が今まさに夕焼けの茜色<sup>あかね</sup>に照り映えているザルツブルクの山並みを見上げて、顔を輝かせ、うっとりとしていた。わたしたちは、現実には生に終止符を打たれた人間だったのに——あるいはだからこそ——何年ものあいだ目にできなかつた美しい自然に<sup>⑩</sup>ミリオウされたのだ。

わたしたちは数分間、言葉もなく心を奪われていたが、だれかが言った。

「世界はどうしてこんなに美しいんだ！」

絶望の最中にあつても、フランクたちは世界に“意味”を見出すことができた。世界の美しさを見て、それが今なお生きるに

値する世界であることに思いをいたすことができた。それはつまり、わたしたちの欲望は、どれほど散逸しまた破碎されても、その網の目にフックを投げかけ、再び結び目を結わえようと、おそらく常にくすぶりうごめいているということだ。

「何をすればいいか分からない」という「自由であることの苦しみ」と、フランクが経験した恐怖や絶望とは、一見正反対のものであるように思われるかもしれない。片や欲望の中心点が結ばれない、ある意味で贅沢な苦しみであり、もう一方は、一切の欲望が崩壊した苦しみだ。現代のわたしたちが抱える「自由であることの苦しみ」と、生命が奪われるかもしれない「絶望」とは、その「重さ」において、格段の違いがあるといえるべきかもしれない。

しかし、欲望がその「中心点」を失ってしまっているという点において、わたしには、両者の苦しみには類似した構造があるように思われる。そして、一切の希望を失ってもなお、わたしたちの欲望が世界へと網を投げかけようとするのだというフランクの体験は、現代のわたしたちを大いに勇気づけてくれることであるように思われる。

わたしたちは、おそらく想像以上に、「欲望の中心点」をたやすく見出すことができるのだ。絶えずくすぶりうごめいている欲望を、わたしたちはただ、しかるべき方向へと導いていけばいいだけなのだ。

それはいったい、どのように？

フランクはいう。「人間のクノウの『大きさ』はとことんどうでもよく、だから逆に、ほんの小さなことも大きな喜びとなりうるのだ」と。小さな喜びを味わい、小さな結び目を作り続けることが、いつしか欲望の中心点を作り出す。小さな欲望（＝意味）の網の目に、絶えずフックをかけ、それをたぐり寄せ続けていくこと……。欲望の中心点は、おそらくそのようにして出来上がっていくのだ。

世界への働きかけがソクザに意味を持つことを（繰り返し）行うこともまた、欲望の中心点を生み出すための一つの初歩的な方法だろう。それはたとえば、キッチンの掃除や、手つかずだった仕事を片付けてしまうといったことでもいい。映画や小説などの感想を、だれかと交換し合うといったことでもいいだろう。自身の働きかけが、目に見えてすぐに「意味」を持つ行為を行い続けること。それはきつと、世界に豊かな意味の網の目を作り出す、最初の結び目を結わえうるはずだ。

之<sup>コヲ</sup> 往<sup>ユケバ</sup> 見<sup>ルト</sup> 客<sup>ヲ</sup>。 奈何<sup>イカニ</sup> 独<sup>リ</sup> 取<sup>リテ</sup> 夫<sup>ノ</sup> 裕<sup>ナル</sup> 蠱<sup>ヲ</sup> 者<sup>ヲ</sup> 以<sup>オ</sup> 為<sup>ス</sup> 其<sup>ノ</sup> 人<sup>ト</sup> 雖<sup>モ</sup> 死<sup>ス</sup>、 而<sup>ト</sup> 不<sup>レ</sup> 出<sup>デ</sup> 於<sup>テ</sup>

我<sup>ニ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 為<sup>ス</sup>。

（顧炎武『日知録』）

〔注〕 1 用—どの薬をどれだけ調合するかという割合。 2 劑—薬による効き目。 3 雜泛而均停—薬を多種類混

ぜ合わせ、それらの割合を各種均等にする。 4 『周礼』医師—『周礼』は周王朝の官制を記した書物で、医師は

その一条目。 5 制其食—医師たちの俸禄を決める。 6 淳于意—前漢時代の名医。 7 孝文—前漢の皇

帝・文帝。 8 時時—しよつちゆう。 9 『易』曰、「裕父之蠱。往見客。」—『易』は占いの書物。占いの結果の一

つに、「父ののこした悪い仕事を寛大に見過ごす。そのまま進むと悪い目にあう。」とある。悪いことを寛大に見過ごさぬよう戒める。

問一 傍線部①をわかりやすく口語訳せよ。

問二 傍線部②は「これが病気が平癒できない原因だ」という意味だが、その「原因」を具体的に述べている部分を本文中より抜き

出し、その始めと終わりの五字を、それぞれ書け。ただし句読点や送り仮名は含まない。

問三 傍線部③を書き下せ。

問四 傍線部④は、どういうことを、何を根拠に言っているか。具体的に説明せよ。

問五 傍線部⑤をわかりやすく口語訳せよ。なおその際に、「裕蠱」がへ注9に示した『易』の占いの結果に見える語である点に注意せよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。)

古之時庸医殺<sub>ス</sub>人。今之時庸医不<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>人、亦不<sub>レ</sub>活<sub>レ</sub>人、使<sub>下</sub>其人<sub>ノ</sub>在<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>死<sub>セ</sub>不<sub>レ</sub>活<sub>キ</sub>之間<sub>ニ</sub>、其病日深<sub>ビニクシテ</sub>、而卒<sub>ツフニ</sub>至於<sub>ニ</sub>死<sub>上</sub>。夫藥有<sub>二</sub>君臣<sub>一</sub>、人有<sub>二</sub>強弱<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>君臣<sub>一</sub>則<sub>チ</sub>用<sub>有</sub>多少<sub>ニ</sub>、有<sub>二</sub>強弱<sub>一</sub>則<sub>チ</sub>劑<sub>有</sub>半倍<sub>ニ</sub>。多<sub>ケレバ</sub>則<sub>チ</sub>專<sub>ラ</sub>、專<sub>ラ</sub>則<sub>チ</sub>其<sub>ノ</sub>效<sub>ハ</sub>速<sub>ハ</sub>。倍<sub>ナレバ</sub>則<sub>チ</sub>厚<sub>ク</sub>、厚<sub>ケレバ</sub>則<sub>チ</sub>其<sub>ノ</sub>力<sub>ハ</sub>深<sub>シ</sub>。今之用<sub>レ</sub>藥者、大抵<sub>ニシテ</sub>雜<sub>ニシテ</sub>泛<sub>ニシテ</sub>而均<sub>ナリ</sub>停<sub>ナリ</sub>。既<sub>ニ</sub>見<sub>ルコト</sub>之<sub>ヲ</sub>不<sub>シテ</sub>明<sub>ラ</sub>、而<sub>又</sub>治<sub>ムルコト</sub>之<sub>ヲ</sub>不<sub>ナラ</sub>勇<sub>ナラ</sub>。病<sub>ノ</sub>所<sub>コ</sub>以<sub>ル</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>ハ</sub>愈<sub>イユル</sub>也。而<sub>シテ</sub>世<sub>ニ</sub>但<sub>ダ</sub>以<sub>テ</sub>不<sub>レ</sub>殺<sub>ル</sub>人<sub>ヲ</sub>為<sub>ス</sub>賢<sub>ト</sub>。豈<sub>ニ</sub>知<sub>ル</sub>古<sub>ノ</sub>上<sub>ノ</sub>医<sub>ハ</sub>不<sub>能</sub>無<sub>レ</sub>失<sub>。『周礼』醫師、「歳終、稽<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>医<sub>事</sub>以<sub>テ</sub>制<sub>ス</sub>其<sub>ノ</sub>食<sub>。十全為<sub>ス</sub>上<sub>ト</sub>。十失<sub>ス</sub>一次<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>。十失<sub>ス</sub>二次<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>。十失<sub>ス</sub>三次<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>。十失<sub>ス</sub>四次<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>。」是<sub>レ</sub>十<sub>ニ</sub>失<sub>ス</sub>三<sub>ニ</sub>四<sub>ノ</sub>、古人猶<sub>ホ</sub>用<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>。而<sub>シテ</sub>淳<sub>ニシテ</sub>于<sub>レ</sub>意<sub>。之<sub>ニ</sub>對<sub>ニ</sub>、孝<sub>文</sub>、尚<sub>ホ</sub>謂<sub>フ</sub>、「時<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>失<sub>ス</sub>之<sub>ヲ</sub>。臣<sub>ハ</sub>意<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>ハ</sub>全<sub>ナル</sub>也。」『易』曰<sub>ク</sub>、「裕<sub>ニ</sub>父<sub>ノ</sub>」</sub></sub></sub>

世界への小さな働きかけが、人生に意味を作り出す。これはちょうど、主と奴の戦いで敗れた奴が、しかし労働を通して世界を変えられることを知ること、自分が「自由」であることを徐々に自覚していくプロセスと同じものである。キツチンが綺麗になる。仕事は片付く。感受性を交換し合う。そうした小さな働きかけとその成果が、わずかながらもわたしたちの「自由」の感度を高め、そして人生に意味を与えるようになるのだ。

(苦野一徳「自由」はいかに可能か)

- 問一 傍線部㉗㉘のカタカナを漢字に直せ。
- 問二 傍線部①「虚栄や承認の欲望」とあるが、どのような感情か。わかりやすく説明せよ。
- 問三 傍線部②「結び目を持たないために、きわめて粗い綱目である」とあるが、どのような状態なのか。具体的に説明せよ。
- 問四 傍線部③「わたしたちの「自由」の感度を高め、そして人生に意味を与えるようになるのだ」とあるが、なぜそのように言えるのか。本文全体をふまえて、わかりやすく説明せよ。

## 〔2〕

次の文章は、大正八年に発表された、芥川龍之介「沼地」である。これを読んで、後の問いに答えよ。

ある雨の降る日の午後であった。私はある絵画展覧会場の一室で、小さな油絵を一枚発見した。発見——と云うと大袈裟だが、実際そう云っても差支えないほど、この画だけは思い切つて彩光の悪い片隅に、それも恐しく貧弱な縁へはいつて、忘れられたように懸かつていたのである。画は確か、「沼地」とか云うので、画家は知名の人でも何でもなかった。また画そのものも、ただ濁つた水と、湿つた土と、そうしてその土に繁茂する草木とを描いただけだから、恐らく尋常の見物からは、文字通り一顧さえも受けなかつた事であろう。

その上不思議な事にこの画家は、<sup>（注1）</sup>鬱鬱たる草木を描きながら、<sup>（注2）</sup>一刷毛も緑の色を使っていない。蘆や白楊や無花果を彩るものは、どこを見ても濁つた黄色である。まるで濡れた壁土のような、重苦しい黄色である。この画家には草木の色が実際そう見えたのであろうか。それとも別に好む所があつて、故意こんな誇張を加えたのであろうか。——私はこの画の前に立つて、それから受ける感じを味うと共に、こう云う疑問もまた挟まずにはいられなかつたのである。

しかしその画の中に恐しい力が潜んでいる事は、見ているに従つて分つて来た。殊に前景の土のときは、そこを踏む時の足の心もちまでもまざまざと感じさせるほど、それほどの確に描いてあつた。踏むとぶすりと音をさせて踝が隠れるような、滑な<sup>（注2）</sup>淤泥の心もちである。私はこの小さな油画の中に、<sup>①</sup>鋭く自然を擱もうとしている、傷しい芸術家の姿を見出した。そうしてあらゆる優れた芸術品から受ける様に、この黄いろい沼地の草木からも恍惚たる悲壮の感激を受けた。実際同じ会場に懸かつている大小さまざまな画の中で、この一枚に拮抗し得るほど力強い画は、どこにも見出す事が出来なかつたのである。

「大へんに感心していますね。」

こう云う言と共に肩を叩かれた私は、あたかも何か心から振り落されたような気もちがして、卒然と後をふり返つた。

「どうです、これは。」

問一 傍線部 a、e の主語は、誰か。問題文中の表現に従つて記せ。

問二 傍線部 ① を、文法的に説明せよ。

問三 傍線部 ② には、どのような心情がこめられていると推察されるか。説明せよ。

問四 傍線部 ③。「人」が誰を指すかを明らかにして、口語訳せよ。

問五 少女は、どのような容姿の女性に成長すると想像されるか。根拠となる箇所を的確に抜き出して、説明せよ。

光源氏十八歳の春のことである。源氏は、熱病にかかつて苦しみ、北山に住む聖のもとにおもむいて、加持祈禱を受けた。その日の夕刻、そこで彼は、尼君と十ばかりの少女を見出した。尼君の言葉から始まる次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「ただ今おのれ見棄てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」とていみじく泣くを見たまふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪つやつやとめでたう見ゆ。

生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき

またゐたる大人、「げに」とうち泣きて、

初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えむとすらむ

と聞こゆるほどに、僧都あなたより来て、「こなたはあらはにやはべらむ。今日しも端におはしましけるかな。この上の聖の方に、源氏の中将の、わらは病みまじなひにものしたまひけるを、ただ今なむ聞きつけはべる。いみじう忍びたまひければ知りはべらで、ここにはべりながら御とぶらひにもまづでざりける」とのたまへば、「あないみじや。いとあやしきさまを人や見つらむ」とて簾おろしつ。「この世にののしりたまふ光源氏、かかるついでに見たてまつりたまはむや。世を棄てたる法師の心地にも、いみじう世の愁へ忘れ、齢のぶる人の御ありさまなり。いで御消息聞こえむ」とて立つ音すれば、帰りたまひぬ。

〔源氏物語〕

〔注〕 1 僧都—尼君の兄。

相手は無頓着にこう云いながら、剃刀を当てたばかりの鬚で、沼地の画をさし示した。流行の茶の背広を着た、恰幅の好い、消息通を以て自ら任じている、——新聞の美術記者である。私はこの記者から前にも一二度不快な印象を受けた覚えがあるので、不承不承に返事をした。

「傑作です。」

「傑作——ですか。これは面白い。」

記者は腹を揺って笑った。その声に驚かされたのであろう。近くで画を見ていた二三人の見物が皆云い合せたようにこちらを見た。私はいよいよ不快になった。

「これは面白い。元来この画はね、会員の画じゃないのです。が、何しろ当人が口癖のようにここへ出す出すと云っていたものですから、遺族が審査員へ頼んで、やっとこの隅へ懸ける事になったのです。」

「遺族？ じゃこの画を描いた人は死んでいるのですか。」

「死んでいるのです。もつとも生きている中から、死んだようなものでしたが。」

私の好奇心はいつか私の不快な感情より強くなっていた。

「どうして？」

「この画描きは余程前から気が違っていたのです。」

「この画を描いた時ですか。」

「勿論です。気違いでもなければ、誰がこんな色の画を描くものですか。それをあなたは傑作だと云って感心してお出でなさい。そこが大に面白いですね。」

記者はまた得意そうに、声を挙げて笑った。彼は私が私の不明を恥じるだろうと予測していたのであろう。あるいは一歩進めて、鑑賞上における彼自身の優越を私に印象させようと思っていたのかも知れない。しかし彼の期待は二つとも無駄になった。彼の話を聞くと共に、ほとんど厳肅にも近い感情が私の全精神に云いようない波動を与えたからである。私は悚然として再

びこの沼地の画を凝視した。そうして再びこの小さなカンヴァスの中に、恐<sup>③</sup>しい焦躁と不安とに虐<sup>さいな</sup>まれて<sup>る</sup>傷しい芸術家の姿を見出した。

「もっとも画が思うように描けないと云うので、気が違ったらしいですがね。その点だけはまあ買えば買ってやれるのです。」

記者は晴々した顔をして、ほとんど嬉<sup>うれ</sup>しそうに微笑した。これが無名の芸術家が——我々の一人が、その生命を犠牲にして僅<sup>わずか</sup>に世間から購<sup>④</sup>い得た唯一の報酬だったのである。私は全身に異様な戦慄<sup>せんりつ</sup>を感じて、三度<sup>みたひ</sup>この憂鬱な油画を覗<sup>のぞ</sup>いて見た。そこにはうす暗い空と水との間に、濡れた黄土<sup>おうど</sup>の色をした蘆<sup>あし</sup>が、白楊が、無花果が、自然それ自身を見るような凄<sup>すさま</sup>しい勢いで生きてい<sup>る</sup>。……

「傑作です。」

私は記者の顔をまともに見つめながら、昂然<sup>こうぜん</sup>としてこう繰返した。

(本文は原則として、筑摩書房刊『芥川龍之介全集3』に基づく。)

〈注〉 1 蓊鬱——草木が盛んに茂っている様子。

2 淤泥——どろ。

問一 傍線①②の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 傍線部①とあるが、「私」がそのような「芸術家の姿」を見出した理由を説明せよ。

問三 傍線部②の「新聞の美術記者」は、「私」によって、どのような人間として捉えられているのか、説明せよ。

問四 傍線部③とあるが、「私」がそのような「芸術家の姿」を見出した理由を説明せよ。

問五 「私」によって「発見」された「沼地」という画は、傍線部④のように解釈されるに至った。この小説における、「沼地」についての「私」の解釈の変化を、詳しく説明せよ。